

書籍案内

方正友好交流の会が編集した本と会員及び関係著書をご紹介します。

* 『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」—ハルビン市方正県物語—』

方正友好交流の会 編著

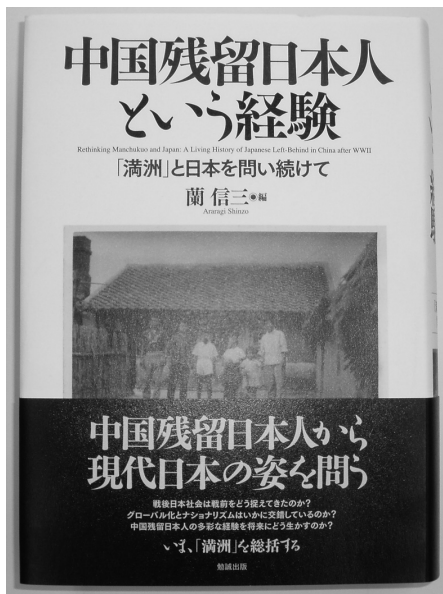
定価 1500 円

本書には、日本人公墓建立までの経緯などを王鳳山と奥村正雄が、中国養父母公墓を自力で建立した遠藤勇さんの半生を大副敬二郎が、方正県住民の家に住み込み、全力で稲作指導に邁進し「日中友好水稲王」といわれた藤原長作さんの一生と、敗戦後八路軍に入り帰国後、日中友好運動や麻山事件の犠牲者の公墓建立で活躍された金丸千尋さんの半生を大類善啓が執筆。また「方正友好交流の会」を成立以前から支えた人々の座談会を牧野史敬が司会進行した記録などが収録されている。(事務局に残部あり)

* 『中国残留日本人という経験 「満洲」と日本を問い続けて』 蘭 信三 編

勉誠出版(株) TEL : 03-5215-9021

FAX : 03-5215-9025 定価 8000 円 (税別)



本書は、中国残留日本人の多彩な経験を通して、現代の日本を問い、「満洲」とは何だったのかを総括する。いわば中国残留日本人研究の総決算ともいえる 600 頁を超える大部の書だ。会員の南誠さんも『想像される「残留日本人」—国民をめぐる包摂と排除』を執筆している。また、会員の猪股祐介さんも『満洲農業移民から中国残留日本人へ』というタイトルで本書に論文を書いている。実は今回の 9 号で猪股さんに本書紹介の原稿を書いていただく予定だったが、多忙のため締め切りに間に合わなかった。猪股さんには次号で詳しく紹介していただく予定である。

* 『風雪に耐えて咲く寒梅のように 二つの祖国の狭間に生きて』

可児力一郎 著

定価 1700 円

著者は、旧満州へ入植してから 17 年ほどの中国での残留生活を経て帰国するまでの記憶を綴ろうと、慣れない日本語と苦闘しながら、2003 年本書を書き上げた。本書は事務局でも扱っているの、払込取扱票を利用されるか、著者宛てに直接申し込んでいただきたい。

〒399-5303 長野県木曾郡木曾町田立 1 2 2 3 可児力一郎 (かに りきいちろう)

電話 0573-75-4755 FAX 0573-75-4557

* 『赤い夕陽の満州にて 「昭和」 への旅』

高橋健男 著

定価 2400 円 (税別)

著者は 1946 年生まれ。本書は「昭和は終わっていない」という問題意識のもと、満蒙開拓という国策とそれに加わった人たちの軌跡を追求した大著。新風舎版に加除修正を加えて再出版。購読希望者は全国の書店あるいは直接文芸社販売部 (03-5369-2299) に。

* 『満州開拓民悲史一碑が、土塊が、語りかける』

高橋健男 著

定価 3000 円 (税別)

満州開拓民に何が起こったのか? 中国残留孤児はなぜ生まれたのか? 国策に翻弄され、満州開拓の果てに斃れた受難の民への鎮魂を込めて、方正に集結した避難民、佐渡開拓民跡事件の殉難者たちを初めて総体的に検証する。方正を知るためには格好の書。希望者は全国の書店あるいは直接批評社 (03-3813-6344) に。

日本中国友好協会 (長尾光之会長)

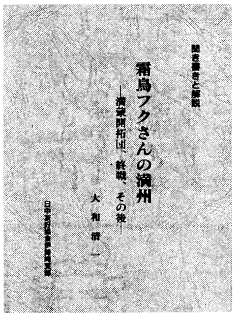
「日本中国友好新聞」09 年 10 月 25 日付

社団法人日中友好協会 (加藤紘一会長)

「日本と中国」09 年 9 月 5 日付

本の紹介

『霜鳥フクさんの満州 - 満蒙開拓団、終戦、その後 -』



表題の小さな冊子。大和清一氏が書き、日中友好協会伊勢崎支部が発行している。語っている霜鳥フクさんは山形県出身で、佐渡開拓跡の惨劇の奇跡的な生存者である。終戦も知らず、地獄の逃避行を続けていた各地の満蒙開拓団の人たち 2000 人近く (正確な数字は分からない) がたど

は分らない) がたどる着き、ソ連軍の包囲攻撃で「自決」を含め全滅した、あの悲劇の「佐渡開拓団」。フクさんの話は、「大地の子」とびったり重なる。父は終戦前 7 月に召集され消息不明、祖父と祖母は逃避行のなかで亡くなり、17歳の兄は警備に立つというここで家族と別れ、母はフクさん(14歳)、弟(12歳)、妹(4歳)と生後 8 月月の乳飲み子を連れて「佐渡開拓団」跡に入ったが、ソ連軍の銃撃を受け乳飲み子を抱いたまま亡くなり(乳飲み子のその後不明)、奇跡的に助かったフクさんと弟、妹は中国人に連れられていくところで見失ってしまう。しかしフクさんの運命は、また大きく変わる。虐待する中国人の家から逃げ出したフクさんは、ハルビンの日本人難民収容所で帰国を待つが、そこは飢餓と発疹チフスの地獄。このままでは死んでしまう、と思いついて八路軍の看護婦に応募し、国共内戦時代から解

放まで 8 年間を従軍看護婦として過ごし、1953 年に帰国した。語られている内容もすごいが、この小さな冊子、それとともに、満蒙開拓団とはなんだったのか、残留孤児、残留婦人とはどういうことなのか「すべてが分かった」と思うほど、周到で踏み込んだ解説がついている。満蒙開拓団について、残留孤児、残留婦人について「一冊で」知りたい(それはもともと無理なのだが) という人には躊躇なくこの小冊子を薦めたい。(大村新一郎)

黒龍江への旅

高野悦子 著



岩波現代文庫 03-5210-4000 1100円 (税別)

人として、芸術性の高い世界の映画を世に送り出している著者もまたその一人である。本書は、満鉄の技師として生きた父を用い、追想した旅の記録だが、期せずして著者

自身、アイデンティティーの探究と、確認の旅にもなっている。著者の父、高野與作は、東京帝大土木科を卒業するや、満鉄に入社、特急あじあ号や鉄道建設に全身を傾けた。與作は、それを満鉄社員たちに配った。ソ連参戦の時、関東軍が鉄道関係の重要書類を焼却するよう命令したが、「施設関係図面は焼くな。一部だけは必ず残せ」と顔を真赤にして駆けずり回ったのも與作だった。初版から 23 年、今回新たに文庫になった。戦後、政界の出馬も断り、叙勲も「あなたに似合わない」という妻の進言で断った。「こんな爽やかな男が日本にいたのだ」と驚く。若い人達にぜひ読んでほしい。(大類善啓)

旧満洲で生まれ育った人たちは、侵略した地で生きた、という負い目に近い感情をもつ一方、中国東北部を思う気持ちは今でも人一倍強いようだ。岩波ホルルの総支配

「度胸のいい男で馬賊の頭目くらいは悠々と手玉にとっしてしま」と、親友・中谷宇吉郎は回想している。ソ連国境を越え、黒河に鉄道が達した時「まるで砂漠に城を築いたようだ」と喜んだ父と同じ黒河に立ち、父を悼み慕う著者の思いが、ずっしりと胸に響いてくる。

《報告》

ありがとうございました

前号の会報8号発行後、カンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、受付けた順に記載しました。09年12月1日現在)

遠藤勇 松尾政司 永瀬明子 中島静枝 篠田欽次 石原健一 高橋幸喜 駒ヶ嶺法子
佐藤良夫 鷺沢弘 伊原忠 生田和美 伊藤幸枝 山田陽子 延城寺・網代正孝 小関光
二 萩原武太郎 山内良子 師岡武男 石田和久 有馬和子 高橋健男 渡辺一枝 菊地
薫 山岸忠夫 阿久津国秀 中島紀子 望月迪洋 奥村勉 鳩貝清太郎 岡崎友美 竹中
一雄 岩噌弘三 山田弘子(越谷市) 北原汎 小畑正子 村田春恵 柴田ケイ子 魚崎宏
阿部恵一 白西紳一郎 稲川清一 前川孝一 鳥島せい子 出口三平 高木誠一郎 穂苅
甲子男 三森陽子 武吉次朗 伊東行子 神田さち子 田中喜久子 水城可 巻口弘 丸
野公平 土川克廣 小早川のぞみ 福井以津子 東山健吾 木村美智子 川口憲 瀧亀久
男 古賀勇一 北澤博史 新谷陽子 鈴木幸子 石原政子 豊田芳美 江見迪子 皆川純
麿 栗原彬 鈴木俊作 松岡満壽男 寿山会 金丸良平 中島俊江 田中實 芹澤昇雄
泉満 里見繁 前川よしえ 成田晃一 宮田一郎 北澤吉三 羽賀美代子 久保祐雄 飯
牟礼一臣 森田恭子 山田弘子(新潟市) 栗原貞子 野田尚道 南誠 柴崎葦津子 伊佐
昭紀 長野県開拓自興会 永原今朝男 風間成孔 森田重夫 木村孝 吉岡稔 長谷部照
夫 名取敬和 可児力一郎 千島寛 田中信雄 山本勝彦 吉川孝人 川内力チエ 塩見
雅正 貞平浩 埼玉県中国帰国者友の会 山本光夫 飯白栄助 丸茂秀直 鈴木革人 矢
島真木子 及川康年 大草正一 貞平浩 黒岩満喜 馬場信昭 滝永登 日本中国友好協
会新宿支部 三上智恵子 小林彰彦 富士国際旅行社 中島のり子 山田嘉彦 中謙吾
千葉健生病院健康友の会中国語教室 紙谷周三郎 齊藤忠雄、NPO法人やまなみ、齊藤
真理 高田俊 湯川勲 北澤吉三 獄崎敦子 佐貫幸雄 寺本康俊 後藤邦汎 長塚淑江
合田享子 肥後茂樹 福島国夫 小林勝人 吉岡広幸 藤村光子 匿名(社会福祉法人中
日新聞社会事業団扱い) 湯本信幸 竹井成範 團野廣一

＜編集後記＞

映画『嗚呼 満蒙開拓団』は今も全国で上映活動が続いている。この映画によって方正日本人公墓の存在もかなり知れ渡ってきた。これもほんとうに羽田澄子さんのお陰である。羽田さん、そしてプロデューサーの工藤充さんには謹んで御礼を申し上げます。

映画を通じて新たな出会いもあり、旧友との再会もあった。多くの人たちが映画館に足を運んでいただいたが圧倒的に高年齢の方が多かった。若い人たち、とりわけ次代を背負う大学生や高校生に見てもらいたいものである。今後も上映できるよう我々も努力したい。

次号は来年5月に発行する予定である。今回締切りに間に合わなかった方々、ぜひ原稿をお寄せください。締切りは3月末です。

上記＜報告＞のカンパなどを寄せられた名前の中に(下から2行目)匿名とある。これは東京新聞の五味洋治記者が書いた記事(5頁)を読んだ読者からの寄付5万円である。この匿名氏のように、これまで方正友好交流の会や会報『星火方正』をご存じなかった方々の善意が次第に広がってきている。改めて感謝申し上げます。

《表紙写真撮影・師岡武男》

『星火方正～燎原の火は方正から～』(第9号) 2009年12月21日発行

発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓 Email：ohrui@jst.or.jp

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6 日本分譲住宅会館 4F

(社)日中科学技術文化センター内 電話：03-3295-0411 FAX：03-3295-0400

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス：<http://www.houmasa.com/>